世界の終わりに、花束を

葉桜照月

※

流した血は無駄にならない。そう嘯いて僕たちを前線に送った上官はどうしているだろう。きっと死んでいる、あるいはもうすぐ死ぬ。彼の血は大地に滲むか、それともあの化け物の胃に吸収されるのか。

三週間は前のことだろう。西方の大陸で確認されたソレは、途轍もなくでかい蛇みたいな怪物で、だがそれに鳥のように足と羽が生えている。

それの正体などどうでもいい。僕たちは中央大陸の住民を東に避難させるための時間稼ぎとして、西方大陸でたった一つの傷もつかなかった怪物と戦わされた。そして負けた。防衛線は崩れ、怪物は王都へ向かった。

その情報さえ銃後に伝えられる者はいないが、怪物は毒を持っている。怪物の押し通ったこの草原は、次第に色を黒に変え、そして灰のように分解されていった。

まだ灰になるのを待っているだけの黒い木にもたれて、かつては郊外のピクニック場として王都住民に愛されていた黒い草原を見る。とはいえ全身黒ずみ、視界も黒く滲んだこの体では、満足に見渡すことはできない。

少し遠くに、影絵のように黒くなった花があった。あのシルエットは確か、アルスなんとか。百合や水仙に似てもいるが、アイツが言うに僕の誕生花だから、不思議と確信が持てる。最期に見るものがこれだと知っていたら、アイツの誕生花趣味にもう少し付き合っていたかもしれない。どんな状況でも名前を忘れるなんてしなかっただろう。

光みたいに輝いていたあの笑顔も、もう既に霞みつつある。ああ、もっと深く知ることを怠った象徴が、僕の最期の景色なのだ。

※

死ぬときは一緒だよ。同じ墓に入ろうね。

その約束は果たされることなく。宙に浮かんで静止して、誰の手でも触れられぬ高さに至って消える。

避難が済んだ街でひとり。どうせ死は避けられぬ、なんてニヒリズムに浸ったわけではない。知らない所で孤独に生きるよりも、見慣れた視界、住み慣れた家、使い慣れた道具たちに囲まれて死ぬのを選んだだけ。

ただひとつ、聞きなれたあの声はない。その持ち主は、多分死んでしまったのだろう。どこかで生きている、なんて希望を持てるほどの光も、この世界にはもうない。

その人は、花が嫌いだった。花の匂いがきついと言った。花と香草に囲まれたこの家を、あまり好きではなかった。でも、私のことは、花も何も跳ね退ける美しさと言ってやまなかった。

その人は、花を好きになろうとした。花の匂いも悪くないと呟いた。花と香草に囲まれたこの家を、よく訪れるようになった。そういう風に、私の気を引こうとする姿は、なんだか愛おしくて。

だから、あの時。国を世界を生活を守ると言って怪物戦線に志願したと聞いた時、笑顔で送り出せなかった。どのみち徴発されるから先に志願していた方が生存確率が上がるとか、そういう理屈は後からいくらでも浮かんでくる。それでも、私の、私だけの気を引いて欲しかった。国じゃなく世界じゃなく生活じゃなく、私を守ると言って欲しかった。それが無理だと知りながら。怒った。泣いた。駄々をこねた。せめて、未来の希望の象徴として、あの人の誕生花を渡していれば、お互いの気休めにもなっただろうに。

ねえ、そう思うでしょ、アルストロメリア。

※

　怪物はたった三週間で人類を窮地に追い込んだ。最初の四日で西方大陸の国家が七つ滅び、一週間で大陸そのものが地図から消えた。
　それからひと月弱。その怪物はこの大陸にも進行を始めた。地図はもはや何の意味もなさない。大地が、喰われていっているらしい。その様を見て戻ってきたものがほとんどいないから、あれが何なのか、誰もわからない。群雄割拠ゆえに各国がかなり高度な軍事力を持っていたはずの西方大陸が歯が立たなかったということだけが、あまりにも絶望的な事実として、我々作戦参謀部にのしかかっている。
　宗教家はこれを甘受すべき天罰だと言ってやまない。商人は避難用具の買い占めをする。学者は怪物を伝承のなかの怪物と比定することに躍起になっている。芸術家と新聞屋はわけのわからんことを言って制止も聞かず戦場へ走っていく。議会は経済的損失の計算を続けている。民間人の避難も、怪物への対応も、もう軍部が自己判断でやっていくしかなかった。
　軍人は平和を愛している。仕事をしたくないのは軍人も同じだ。だから、死ねと命令して若い兵士を送り出すことが、どれだけの屈辱か、私達しか知らない。
　こんな屈辱、耐え切れない。
　縄と踏み台みたいなありふれたものも、用意するのは大変だった。
　遺書を残す意味はない。届ける者がいないから。
　準備を終えて、ふと愛読書を開く。
　しおりにしていた淡い紫の押し花が綺麗だ。
　この花を、いつまでも目に入れておきたい。

※

　もしあれが天罰ならば、あの獣は咆哮などしない。咆哮とは感情の吐露。失敗作を滅ぼすのに感情はいらない。だからあれは天罰じゃない。じゃあ何かって？　そんなものどうでもいい。あの獣は僕達の存在に気付かずに地上で暴れているからだ。
　宇宙船の窓から、真っ黒に塗り潰されたような西方大陸を見ている。文明らしさは一切ない。山があるかも分からない。ただ何もなかったように真っ黒だ。
　僕達は探検隊だ。宇宙の彼方にある住めそうな星を求めて旅をする。もちろん、それはろくなアテもない途方もないものであるし、僕達が人類として残された最後の希望というわけである。
　宇宙船は広くて、確か僕含め数十人くらいのクルーメイトがいたはずだ。そんな大所帯の僕たち全員が入れるこれまた広い会議室のその大きな机の上には花瓶がある。もちろん宇宙の無重力でも大丈夫なように特別な籠に入っているのだけれど、中に入っている花は、眼下に広がる我が故郷たるこの星のもので、これを見るたびに今まさに失われつつある故郷が脳裏に鮮やかに想起される。
　この花は他にもいくつもの花や種や土と一緒に花屋の女性から贈られたものだ。これらのおかげで当分はあの大地を忘れることはないだろう。
　正直なことを言えば、これは無理な旅だと思う。この方向にあと数十年も進めば、人類が住めるかもしれない星に到着出来る。そんなことでクルーメイトのモチベーションは持続するのだろうか？　しないだろう。
　窓の外に星は瞬いている。ただ、それ以外の宇宙の黒が、あの大陸の黒と重なって見えてならなかった。

※

世界の終わりに何か出来ることがあるだろうか。
一介の花屋に過ぎない私に。しかも花も種も土も、なにもかも託してしまった私に。
　人類は希望する生き物だ。そして人類は宇宙船のクルーに希望を託した。――であれば、残された側である私達は、何が残っているのだろう？
　残っているのは、とりわけお気に入りの青い花の苗。これを渡すわけにはいかなかった。商品はほとんど託したから店内はガラガラで、なんだか寂しい気持ちになって外に出れば、空は高くて青くて、まだ不穏さを感じさせない。それが取り繕いのようで余計に悲しくなった。

忘れえぬ姿を、滲んだ視界に焼き付けた。
――花ももう見ることもないだろうな。
そう言ったあの人にスイートピーの押し花を託した。
最後の時間に、餞別の花。
死にゆく貴方に、思いの丈を。

不帰の旅路に、追憶の花。
死にゆく者より、見果てぬ夢を。

最後に残った花束は、大事に持って。
そのまま地面に横たわり、まだ青い空を望む。
あの青い花――鳥兜が回り始める前に、深く目を閉じ。
花束を抱いたまま、眠りにつく。
死にゆく世界を、愛する決意。

世界の終わりに、花束を。